

原告團

遺族・CO裁
判、災害責任
追及、特集号

原告団レポート

遺族——
浅井シトエさん

痛々し18年

三池大爆発で夫をなくした遺族のひとり、浅井シトエさんは同じ遺族仲間と手を取り合って、三池縫製工場に働いてゐる。

三池縫製工場といえは、とくに「遺族の生活対策のために」と大牟田に誘致された企業で、仕事は検査だ。送られてくる、できあがった繊維製品に目を通し、縫い目が飛んでいわないか、縫いそこはないか、あるいはネームはちゃんとついているか、などを調べる作業。

勤務時間は、朝八時十五分から夕方
の五時まで。休憩時間といへば、
昼食時の正午から四十五分間のた
だの一回だけで、ほかに五分間の
休みも与えられてはいない。ま
さに実労働八時間。それも、検
査係の彼女の場合一日じゅうが立
ち仕事。

浅井さんは大正十五年八月十五日生まれだから五十五歳で、あと半年もすれば定年だ。

住まいは大牟田市野添町十六番地。野添宅六十棟。働く職場までの道程はそれほどなく



まず、原杜宅から自転車で開
(ひらき) 駅までペダルを踏む。

だから、三池縫製へ通勤するには、福岡と大牟田の間を走っている西鉄電車を利用しなければならなかった。

ことで、それまでは三池郡高田町（福岡県下）にある原杜宅（三井鉱山経営）の一隅に、家族とともに住んできた。

でも野添社宅に住むようになってのは、夫をなくしてから五年ほどたった昭和四十三年の夏以降のことだ。

故人^よ妻の思ひ察せよ

子どもたちもそれぞれに負けず生き抜いたが

よくぞ歩き通した十八年

写真上は、故人が元気だったころ田川の美
 姉・古川ハル子さんをたずねたとき、仲よ
 くうつったもの。下は、遺族となった浅井
 さんが昨年の六月、姉・古賀チズエさんに
 誘われて、北海道に思い出の旅をしたとき
 の写真（まんなかの人）。「楽しかったこ
 とは、忘れられない」とのこと。



不幸の末に

當時（昭和三十八年十一月九日）こそまだ若く、三十七歳だった彼女も、今はすでに初老。おまげに仕事は一日じゅう立ち通しの検査係。早くから体のなかに果食ってしまった神経痛などで体はぼろぼろだが、それでもピッコひきひきの通勤。

亡夫の名は末義さん。大正十四年三月一日生まれだから、彼女よりひとしう年上だった。今生きていれば五十六歳のはずだ。

結婚したのは、昭和二十三年二月二十五日。常一番の機械工として、すでに三川鉾の坑底で働いていた。

忘れぬ日

あのころ、浅井さんは住んでい
涙は、こんどはとまらなかつた
が……。

その暮らし

その日から、早や、三池縫製工
と立ち通しで働く間に過ぎてい
に十八年間。

記したように遠く高田町の原社からの通勤だったのだ。

「朝は、中学校と小学校に通う八の子どもたちが、起きたらすぐ食べられるように、朝食をちゃんと並べてから働きに出かけ、一日の仕事が終わると、はやる気持ちをおさえながら、途中、夕食と翌日の朝食のためのおかずを買って帰る。」

たに駆け帰り、そして夕食の仕
をする。これが毎日の例でし
ても子どもたちが、そんな毎
学校から帰ったあと、母親の
い家で果たしてどんなに暮ら
きたのか、さっぱりわからず
てしまったのです。思えば、
わけなくて……」

思
い
察
せ
よ

ともあれ、浅井さんの夫——故義さんは、彼女の実家にほど近い高田町（前記）海津の一寺院にっている。遺骨が、同寺の納骨に安置されているのだ。

今、彼女は過去十八年間自分が
歩いてきた道を回想しながら、し

「だれからでもよみかすげん、
ほんとに、いっぺん、四人もの子
もをかかえながらよくやっつき
とほめてもらいたいです」「
故人よ、もし心あらば、健気に
生きてきたこの妻の胸のうちの思
慕せよ。」

その賃金は

を聞いて、母親の私もつらつら涙を流してしまいました」

これは、ある一人の遺族の述懐である。

「ひと足先に駈けつけてく

た身内の者や、主人のお友
お棺を取りまいて泣いて
が返って不思議でなりませ

た。女房の私の目からは、
も大きな悲しみのためにか

「はい、はい。さういふことは、彼女が記憶のなかで、自分がおかれた理

「さういふでしよ、それならどうにかするかい」と聞かれたところ
が、そのころまだ知なかつたその
子どもが答えたさうです、「よか
もん、姉ちゃんのおらずもん」。
その姉にしてから、まだ中学生の
ころじゃつたのですよ。それでも
子どもたちは手とまたで、お互
い手を取り合いながら、しつかり
と生きていくくれたですね。話